

「人は人殺しができない存在である」

2016年11月23日

安倍政権は、法制化した安保関連法に基づき、南スーダンに武器の使用を認める「駆け付け警護」と称して陸上自衛隊を、多くの危険と反対を押し切って派遣した。

米国で1980年代に、第二次大戦以降の戦争を経験した退役軍人や家族たちが、退役軍人の会「ベテランズ・フォー・ピース（VFP）」を組織した。米国を中心に120以上の支部があり、数千名の会員がいる。退役軍人や戦争被害者の支援、戦争体験を伝える活動などで、世界に反戦・平和を訴えている。

「東京新聞」は、アフガン戦争とイラク戦争に従軍したVFPのメンバー二人が、17日都内で記者会見して語った内容を掲載していた。それは、南スーダンに「駆け付け警護」として新任務を付与しての派遣は戦場への距離を近づける日本に対する警鐘であった。

ロリー・ファニング氏は、9・11の同時多発テロのようなことが起こらないよう、また、何万ドルもの学費ローンを返済支援してくれるので、軍に志願した。アフガニスタンに行き、「タリバン掃討作戦」に従事した。若者を強引に収容所に連行したが、タリバンと無関係だったことがしょっちゅうあった。誰が敵か市民か見極められない。南スーダンでも同じである。武器を持つ自衛隊を派遣すれば、九条が規定する自己防衛の趣旨から外れる。現地の人々が求める食料やインフラ提供などの支援ができるのではないか、と話された。

マイク・ヘインズ氏は、海兵隊の特殊部隊としてイラク侵攻作戦に従事した。爆弾を仕掛け、爆発させて家に押し入るが、殆どが一般家庭である。恐怖に怯えた6～7歳の少女が「ママ、ママ」と泣き叫ぶ声が今でも耳から離れない。「僕らは死と破壊をもたらし、大切な家庭をばらばらにした。自分自身がテロをしていると思った。（中略）自分の手を他人の血で染めるようなことは絶対にしてはならないことだ。」

今も、空爆とミサイル攻撃に晒され、銃撃を受け続けている地域がある。死と恐怖と飢えが充満し、耐えがたい呻き、叫びが上げられている。しかし、戦闘で死者は何人、その内、子どもは何人であったと伝えられるだけで、そこで繰り返されている苦悩は定かに伝わってこない。ベトナム戦争では、従軍記者が戦場の生々しい状況を伝えたが、それ以降は、従軍記者を入れず、情報は限られている。

政治学者のC・ダグラス・ラミス氏と音楽家の喜納昌吉氏の対談集『反戦平和の手帖』が上梓されている。その中で、ラミス氏が「侵略する側」が受ける傷について語っている。戦争に従軍した兵士の97%がPTSD（心的外傷後ストレス障害）を負い、ベトナム戦争で、約6万人の兵士が戦死したが、帰還した兵士の自殺者は戦死者を超えていると言う。

アフガン・イラク戦争で6,500人くらいの米兵が戦死した。帰還兵は、年間320人の自殺者を出し、戦死者の数を上回っている。日本の自衛隊はイラクに派遣された。宿営地の近くに着弾したことはあったが、実際の戦闘行為はなかった。それでも、5,600人の陸上自衛隊の内21人、3,600人の航空自衛隊の内8人、計29人が自殺をしている。自殺は最終的な手段で、不眠、鬱から薬物・アルコール依存症になる者、事故・事件を起こす者、生活意欲を失いホームレスになる者など、多様なPTSDを負っている。

不謹慎な言い方ではあるが、兵士たちの受けた傷に救いを見るような思いになる。人を殺せば、心を病む。人は人殺しができない存在として造られているのではないか。米国に満延している傷を負った兵士たちを癒し、更なる傷を広げないようにVFPは活動している。国は人殺しの戦争に行かせては、断じてならない。この理念を共有したいと切に願う。